

臨床看護実践における看護師の知の様相ー2年目看護師の臨床看護実践における知の語りー

著者	杉田 久子, 西村 歌織, 唐津 ふさ, 福井 純子
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	14
号	1
ページ	31-35
発行年	2018-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00064562/

〔研究報告〕

臨床看護実践における看護師の知の様相 — 2年目看護師の臨床看護実践における知の語り —

杉田 久子, 西村 歌織, 唐津 ふさ, 福井 純子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

要旨

本研究は、2年目看護師が臨床看護実践の語りをどのように意味づけし、「知」を表現するのかについて「臨床看護実践を語る会」という実践共同体の語らいの場から検討した。研究参加者は2年目看護師4名（男性2名、女性2名）であった。

2年目看護師が語る知は、11の概念カテゴリーで表現され、3つの様相が見いだされた。2年目看護師の知の様相は、これまで場面単位で認知していた状況を文脈として理解できる変化を自覚し、積極的に自分の意見を発信し、内省を繰り返す経験を重ねることで、発展途上にある成長を実感することとして表現された。また、患者状況にコミットすることで感情が動き、その看護実践が次の実践の成功となるように、さらなる高みを目指す実践者としての経験知を語り、自分の看護とは何かを見つめる転換点となることが示された。そこにはエキスパート看護師の看護実践から学ぶ審美的な知についても語られることが明らかとなった。

キーワード

2年目看護師, 臨床看護実践, 看護の知, 語り

I. はじめに

医療を取り巻く環境は大きく変化し、国民の医療に対する意識も高まり、質の高い医療の提供ができる人材の育成が求められている。本研究は、2年目看護師が臨床経験をを通して成長するにつれて、どのように看護実践を意味づけし、知(knowing)を表現するのかについて「臨床看護実践を語る会」という実践共同体の語らいの場から検討するものである。

Lave & Wenger (1991)によれば、実践共同体とは、あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人びとの集団をさしている。語らいの場に参加した者が、日々の忙しさの中で流されてしまったことや、心残りの出来事などを実践共同体の仲間に向けて語ることで、話が広がったり、深まったり、思い出したり、相手との相違を考えたりと、意識化されることを狙いとしている。したがって、仲間が自分の語りに反応してくれることによって意識化した関係の知を生み出すことが期待できるのである。

先行する研究(臨床看護実践における看護師の知の様相—新人看護師の臨床看護実践における知の語り—, 当学会誌収録)において、新人看護師が語る知の様相

には、患者との関わりや先輩看護師との関わりを通して、看護師としての自立や自律を見いだす〔看護実践の知〕の語りと、自分のことだけで精一杯な入職当初、周囲に気を配れるようになった入職6~8ヶ月目、これらを経て自己の到達点の模索を示す〔自己成長の知〕の語りが見いだされた。分析結果から、看護実践の経験を一つひとつ積むたびに周囲からの影響を受けながら成長することを自覚している個人知の様相が明らかとなった。

そこで本研究では、新人看護師から続く2年目看護師の看護実践の知の様相を見だし、看護基礎教育および臨床現場での継続教育におけるキャリア形成支援のための基礎資料を提供したい。

II. 研究目的

2年目看護師が臨床看護実践の語りをグループメンバーと共有することから、意味づけられた知の様相を明らかにする。

なお、本研究における「知」とは、単にこれまで学んだことを個人の知識として表現するものを指すのではなく、仲間と共に、これまでに獲得した知識や技術を関係づけたり意味づけたりする「関係の知」を意味している。また、「知」の様相とは看護実践の語りを共有する交流を通して意味づけられた「知」のあり様をいう。

<連絡先>

杉田 久子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

E-mail: sugita@hoku-iryo-u.ac.jp

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究デザイン

2. データ収集期間

2013年11月～2014年3月

3. 研究方法

1) 研究参加者

急性期医療を提供するA市の地域中核病院に勤務する2年目看護師を対象に、継続して開催される「臨床看護実践を語る会」に参加の意思を示した4名。

2) データ収集方法

データは、陣田(2007)の文献を参照し、5つの基本ステージ(①想起、②内省、③焦点化、④醸成、⑤展開)を縦軸にとりながら、収集した。看護実践内容の自由記述の表現(①、②)、「臨床看護実践を語る会」からのグループディスカッションの内容(③、④)、および個人インタビューの内容(⑤)から得た。データ収集のステップの詳細と「臨床看護実践を語る会」の開催方法は、先行論文(臨床看護実践における看護師の知の様相—新人看護師の臨床看護実践における知の語り—, 当学会誌収録)を参照。

3) データ分析方法

収集したデータのうち、看護実践内容の自由記述については、グループディスカッションに参加するために語りの内容を想起することが主要な目的であるため、語った内容の裏付けとして用いる参照データとした。

逐語録とした音声データは、木下(2003)が提案した分析手法を参考として、質的帰納的に分析を行った。概念の生成法であるオープン・コーディング、概念の精緻化のための分析ワークシートの作成、およびカテゴリ生成を行った。詳細は、先行論文(臨床看護実践における看護師の知の様相—新人看護師の臨床看護実践における知の語り—, 当学会誌収録)を参照。

4. 倫理的配慮

本研究は、北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理委員会(承認番号:13N011008)および協力施設の倫理審査の承認を得て実施した。

先行研究の参加者に対し、2年目看護師としての研究参加について改めて口頭と文書で研究内容を説明し、研究参加の同意と承諾を得た。研究参加は自由意思であること、インタビューの内容の音声録音の承諾、データの匿名化と研究以外での不使用、個人情報保護を保障すること、途中辞退でも不利益が生じないこと、データの管理保管を厳重にし、研究終了後に一定の期間をおいた後でデータを破棄することを保証した。

「臨床看護実践を語る会」は参加を強制するものではなく、継続参加は任意であり、途中辞退も妨げない。また、研究参加が職務遂行上の査定などに影響を与えないことを保証した。研究者はグループディスカッションの円滑な進行のためファシリテーターとして参加をするが、批判的態度やそのような印象を与えることのないよう配慮した。

Ⅳ. 結果

1. 「臨床看護実践を語る会」開催概要

研究に参加した2年目看護師は4名(男性2名、女性2名)、22～24歳、内科病棟勤務1名、救急部勤務1名、手術室勤務2名であった。全員が看護専門学校を卒業後の就業であった。「臨床看護実践を語る会」は就業1年8ヶ月と2年目終了時の2回開催した。第1回のテーマは、「一皮むけたなと感じた経験」で、参加者は3名であった。第2回のテーマは「最も心に残った看護について」で、参加者は3名であった。1回の開催時間は約60分、総計138分であった。

2. 2年目看護師の臨床看護実践における知の様相

2年目看護師が語る知には、10の概念カテゴリーからなる語りの3つの様相が見いだされた。1つ目は、これまで場面単位で認知していた状況を文脈として理解できる変化を自覚し、積極的に医師や先輩看護師に働きかけて自分の意見を発信し、内省を繰り返す経験を重ねることで発展途上にある成長を実感する様相であり、5つの概念カテゴリーで表現された。2つ目は、患者状況にコミットすることで感情が動き、その実践が次の実践の成功となるように、さらなる高みを目指す様相であり、3つの概念カテゴリーで表現された。3つ目は、先輩看護師が行う看護実践の審美性を認識し、単なる憧れの存在としてではなく、その凄さを見極めて学びとして継承する様相であり、2つの概念カテゴリーで表現された。また、これらを統合して、2年目看護師としての自覚と課題が1つの概念カテゴリーで表現された(図1参照)。

以下に、概念カテゴリー(「」で表示)の内容を語りの表現の一部(斜体)と共に示す。

1) 状況を文脈として理解できる変化を自覚し、積極的に医師や先輩看護師に働きかけて自分の意見を発信し、内省を繰り返す経験を重ねることで発展途上にある成長を実感すること

「業務の流れを予測する」

状況を文脈として理解できるようになり、優先順位づけなどの臨床判断ができること。

自分の入るオペ単体でしか見られなかったんですけど、経験していくうちに、オペの流れの中で自分がどういう位置にいるのかというのが何となく想像できるようになってきて

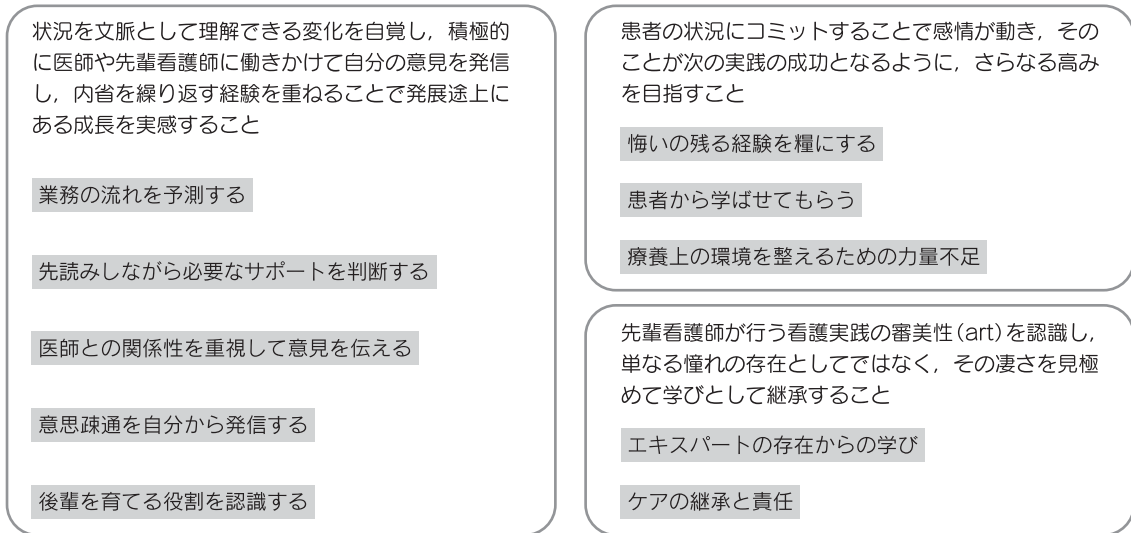


図1. 2年目看護師が語る知の様相

「先読みしながら必要なサポートを判断する」

自分のできる力量を見極めて、冷静に先読みし、助けを求める判断をすること。

他職種との連携とかも、今まではちょっと…もじもじして先生（医師）をお願いすることができなかつたんですけど、（中略）「次、何をする」と先に行動を読んで、依頼することもできるようになってきたのかな。ちょっと一呼吸置いて、これとこれが必要かなとか、この準備をしなきゃいけないかなというのを考えることができるようになったかな。

「医師との関係性を重視して意見を伝える」

医師との関係性を重視しながらも、度胸をきめて、自分から意見を発信すること。

先生（医師）方が忙しいとやっぱりイライラし始めるんですけど、そんな中でも「ぐいぐい声を掛けるようになったね」と言われて。（中略）先輩からお尻をたたかれて、言っておいでと言われて、行くしかないみたいな感じで、何回かぐいぐい行ったのは覚えていて。

「意思疎通を自分から発信する」

周囲の状況も勘案しながら判断したことを同僚や先輩に相談したり、発信すること。

一緒に協力しながらやっていかなきゃいけない。自分のことだけ考えればいいというより、周りの動きも見て、役割を与えて、自分も与えられてという、その意思疎通を自分から発信できるようになった。

「後輩を育てる役割を認識する」

自分の基礎は先輩から継承された知であり、それを後輩に伝える役割を認識するが自信がないこと。

基礎をちゃんと教えてもらえたから、今の自分がある。後輩たちにその基礎の部分の自分が教えることを担っているというか、一番大事なところを自分が

患者の状況にコミットすることで感情が動き、そのことが次の実践の成功となるように、さらなる高みを目指すこと

悔いの残る経験を糧にする

患者から学ばせてもらう

療養上の環境を整えるための力量不足

先輩看護師が行う看護実践の審美性（art）を認識し、単なる憧れの存在としてではなく、その凄さを見極めて学びとして継承すること

エキスパートの存在からの学び

ケアの継承と責任

2年目のあるべき姿に近づく感覚

教えなきゃいけないというプレッシャーがちょっとあります。後輩の、本当に基礎づくりの段階で自分に関わるなんて、いや～できるのかなという不安しかないです。

このように2年目看護師は、状況や周囲の様子をよく勘案しながら、自信がないながらも自ら発信することが役割であると認識していた。

2) 患者の状況にコミットすることで感情が動き、そのことが次の実践の成功となるように、さらなる高みを目指すこと

「悔いの残る経験を糧にする」

それなりの努力と頑張りに基づく自己内省から、もっと善くするための実践者としての自律的な示唆を得ること。

やっぱり手術って大きな何かのきっかけでもあるし、そこに自分がどう関わっているのかというところで考えることが多くなったというか、その分、悔いが残りやすいというか、これで善かったのかなとか…。自分に知識があって、自分から率先して、どんなことが起こるのかということ予測して動いていれば、もっと短期間にいろいろなことを患者さんにできたんじゃないか。

「患者から学ばせてもらう」

患者への看護実践が次の看護実践の成功につながる喜びと達成感から学んでいる感覚を得ること。

自分の知識不足というのわかったけど、患者さんから学ばせてもらうというのはこういうことなんだなと、初めてそこでちゃんと思えたような気がして、1年目の時は先輩から言われて、それがきっかけになることって結構多かったんですけど、2年目になって患者さんから教えてもらうことが増えてきたのかなと思います。

「療養上の環境を整えるための力量不足」

理想の実践に追いついていないもどかしさを感じつつも、それが知識や技術を磨こうという動機づけになること。

十分な手はずが整えられないまま対応しちゃうということが、すごくあるので、…自分の力量不足と、その環境を整えるときの、何かもうちょっとこうすれば良かったというのがあります。

このように2年目看護師は、患者と向き合う実践の中から学び、実践者としての磨きをかける動機づけを得ていた。

3) 先輩看護師が行う看護実践の審美性 (art) を認識し、単なる憧れの存在としてではなく、その凄さを見極めて学びとして継承すること

「エキスパートの存在からの学び」

先輩看護師が単なる憧れの存在なのではなく、その凄さを見抜き、見極める目が養われること。

先輩の(手術の)機械だしがきれいだと、どれだけ時間がなくても、その先輩がやっていたら、まず問題ない。皆が認めて、自分ももちろん凄いなと思うんですけど。でも自分にはその先輩の方法論は合わなくて、もう1人の先輩が、自分にはすごいしくりくるんですね。こういう価値観が一緒だとか、そういう先輩を見つけれたら、すごい自分って強くなれるなと思いました。その先輩をお手本にしようと思う、そういう感覚が大事だなと。教えてもらいたい、この人のこういうところを吸収したいという先輩はいっぱいいるので。

「ケアの継承と責任」

看護実践を受け継いでいくことの重要性和責任を意識しはじめること。

自分が教えてもらって、それを自分もやっていて、すごい良いと思うことは、後輩にも教えてあげたいなと思うので…。自分の教えたことが後輩の基礎になると考えたら、ちょっとぞーっとします。

このように2年目看護師は、エキスパートが行う看護実践の方法についての価値に気づき、創造的に感性をはたらかせて洞察し、自分自身の信念を見だし始めており、それは継承されるべきことであると意味づけしていた。

4) 3つの様相から、2年目看護師としての自覚と課題を見出すこと

「2年目のあるべき姿に近づく感覚」

まだまだ未熟で発展途上にあるが、成長を実感していること。

自分が思い描いていた2年生になれたかどうかはありますが、差はあるけど、何となく近づいてきているというそんな感じはします。

このように、理想とする看護師像には及ばないながらも、自分自身の立ち位置を実感する感覚を得ていた。

V. 考察

2年目看護師が語る知の3つの様相は、1つ目に、状況を文脈として理解できる変化を自覚し、積極的に医師や先輩看護師に働きかけて自分の意見を発信し、内省を繰り返す経験を重ねることで発展途上にある成長を実感すること、2つ目に、患者の状況にコミットすることで感情が動き、そのことが次の実践の成功となるように、さらなる高みを目指すこと、3つ目に、先輩看護師が行う看護実践の審美性 (art) を認識し、単なる憧れの存在としてではなく、その凄さを見極めて学びとして継承すること、が見いだされた。意味づけられた2年目看護師の知について、先行文献を参照しながら考察する。

2年目看護師は、看護実践の1つひとつを場面単位で認知していたが、看護実践の流れを意識しながら状況を文脈として理解できる変化を自覚し(「業務の流れを予測する」)、優先順位をつけたり、予測をしたりできるようになっていた(「先読みしながら必要なサポートを判断する」)。そして、積極的に医師や先輩看護師に働きかけて自分の意見を発信し(「医師との関係性を重視して意見を伝える」)「意思疎通を自分から発信する」、内省を繰り返す経験を重ねることで発展途上にある成長を実感していた(「2年目のあるべき姿に近づく感覚」)。森・亀岡・定廣・舟島(2004)は、新人看護師は看護師としての責務を自覚するあまり、他者への支援要請を躊躇したり、否定的評価を避けることに関心を集中させやすい状態にあることを示唆しているが、本研究では、2年目看護師は積極的に自分の意見を発信しており、先輩看護師や周囲の助けを借りながらも自分の成長を確認できていた。しかしながら、2年目看護師は独り立ちからの不安によるストレスを強く受けている(瀧口・麻植・千郷・尾田・堀, 2003)。本研究でも、自己成長や達成感を感じつつ、あるべき姿に近づいていると感じる一方で、自分が思い描いていた理想の看護師像とのギャップも同時に感じていた(「療養上の環境を整えるための力量不足」)。瀧口ら(2003)は、早く一人前として自立したいという、理想と現実とのギャップに関して期待に応えられず、見放されるのではないかと不安を感じていることも明らかにしている。2年目看護師は、新人から「一人前」になる移行期であり、周囲からの支援体制にはまだまだ受動的な態度であることが多い(谷脇, 2006)。「先読みしながら必要なサポートを判断する」、「意思疎通を自分から発信する」のような自ら支援を求める主体性を獲得することが「一人前」の成長過程における課題となるだろう。

一方で、業務偏重になりがちで環境にのまれている

状況から脱却し、患者と向き合う実践から学びを獲得し（「患者から学ばせてもらう」）、その内省から課題を見だし（「悔いの残る経験を糧にする」）、自ら看護実践の環境を作り出していくことのできる移行期にあった。それは日々の実践とかけ離れた理想を追うことではなく、悩みや心に引っかかることから普段の看護実践について新たな意味を見だし、その実践が次の実践の成功となるように、さらなる高みを目指しており、自分の看護とは何かを見つめる転換点であることが明らかとなった。塚本・舟島（2008）は、実践能力不足に起因する就業継続困難は新人看護師に生じやすく避けられない問題ではあるが、一方で乗り越えられるものであることも示している。先述のとおり、ここで先輩看護師からの支援を求め、獲得できることによって、安心して患者と向き合う実践ができ、またその実践の経験から知を導き出すことができるようになる。「悔いの残る経験を糧にする」で、看護師は、自己内省によって理論的知識を拠り所としつつ経験を積み重ねた知として創造し、次なる実践への指向に役立っていた。

こういった実践からの学びの基礎は、先輩看護師からの指導や助言を大いに受けて創られたものであり、これを途切れることなく後輩に教え伝えていく必要に気づきはじめていた（「後輩を育てる役割を認識する」）。また、共に関わる同僚・先輩看護師の中でもエキスパート看護師の存在は、単なる憧れとしてではなく素晴らしい看護実践の審美性（art）として、その姿を見極めて学びとし、後輩看護師にも継承する責任があることを自覚していた（「ケアの継承と責任」）。新人看護師にとって先輩看護師の卓越性の発見はロールモデルの発見につながり、実践に必要な行動や態度を習得するための有効な学習方法になる（塚本・舟島、2008）。本研究の「エキスパートの存在からの学び」のように先輩看護師の存在が、学習のモデルから理想の看護師モデルになることは、すなわち2年目看護師が成長するための大きな要因になるものと示唆される。

以上のことから、2年目看護師が語る知の様相は、自己成長や達成感を感じつつ、業務偏重となることで生じる理想とする看護師像とのギャップや葛藤を抱えながらも、看護実践の経験知から新たな意味を見だしており、自分の看護とは何かを見つめる転換点となることが示された。そこにはエキスパート看護師の看護実践から学ぶ審美的な知についても語られることが明らかとなった。

VI. おわりに

本研究は、「臨床看護実践を語る会」で語りをグループメンバーと共有することから、2年目看護師の知の様相を明らかにすることを目的とした。その結果、2年目看護師は、看護実践の経験を通して自分の看護と

は何かを問いながら自律形成している途上にあることが成長過程として表現されてはいるものの、自信欠如を抱えた状態にある不安定さの渦中にもあった。引き続き3年目看護師の看護実践の知について、語りを通して共有することとした。

謝辞

本研究にご協力頂いた参加者の皆様ならびに所属施設の看護管理者の皆様にご心より感謝申し上げます。なお、本研究は、JSPS科研費25463308の助成を受けて実施し、本研究の一部は、第34回日本看護科学学会学術集会において発表した。

文献

- 陣田泰子（2007）. 学習する組織を創る「知」の共有—実践知をどう概念化し伝えるか—. 看護展望, 32 (13), 12-16.
- 木下康仁（2003）. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂, 東京.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991) / 佐伯胖訳, 福島真人解説 (1993). 状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加. 産業図書, 東京.
- 森真由美, 亀岡智美, 定廣和香子, 舟島なをみ (2004). 新人看護師行動の概念化, 看護教育学研究, 13 (1), 51-64.
- 杉田久子, 唐津ふさ, 西村歌織 (2018). 臨床看護実践における看護師の知の様相—新人看護師の臨床看護実践における知の語り—, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 14 (1), 23-29.
- 瀧口祐子, 麻植真弓, 千郷ひとみ, 尾田睦美, 堀八千代 (2013). 卒後2年目看護師の思いや支援ニーズの実態調査, Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal, 18 (1), 88-92.
- 谷脇文子 (2006). 卒後2～3年目看護師の臨床能力の発展に関する研究—卒後2年目と3年目看護師の臨床能力の向上・促進と経験の特質—, 高知女子大学紀要, 55, 39-55.
- 塚本友栄, 舟島なをみ (2008). 就職後早期に退職した新人看護師の経験に関する研究—就職を継続できた看護師の経験との比較を通して—, 看護教育学研究, 17 (1), 22-35.

受付：2017年11月30日

受理：2018年2月22日